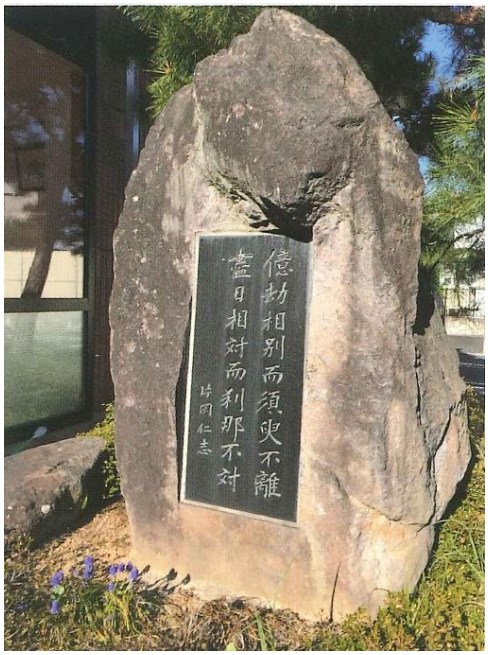
我が教育会の取組

一般社団法人　長野上水内教育会

長野上水内教育会の
大切にしてきたもの・
大切にしていきたいもの

長野上水内教育会館



片岡仁志　書

長野上水内教育会館入口にある石碑

億劫相別而須臾不離
盡日相対而刹那不対

（おくごうあいわかれて　しゅゆもはなれず
じんじつあいたいして　せつなもたいせず）

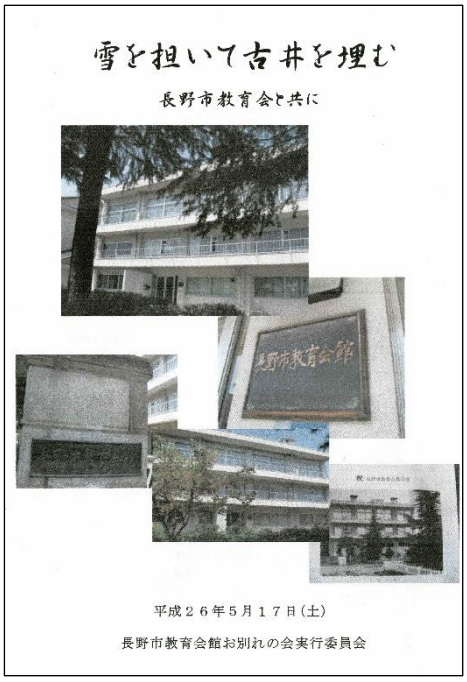
西田門下の片岡仁志は、長野上水内の地に数多く足を運び、哲学と教育についての講演を行った。二本の栽松も意味あるものとなった。

「雪を担いて古井を埋む」

雪を担いでいって井戸を埋めようと思っても出来ることではない。全く無駄なことである。雪を井戸に投げれば、跡形もなく消える。土や砂で埋めるのが合理的というものだろう。

しかし、何物をも求めない行為に、合理性を超えた純粋性があるのではなかろうか。人間本来の純粋性は美しく、たとえ雪を担って古井戸を埋めるようなことに見えても、先輩から後輩へ永遠の目的のために永遠に努力し続けることは大きな意味をもつ。

（長野市教育会館のお別れ会に配布された資料より）



一般社団法人　長野上水内教育会

長野上水内教育会創立 10 周年記念式典

（令和元年５月 12 日　於：ホテル国際 21）

シンポジストに質問する児童

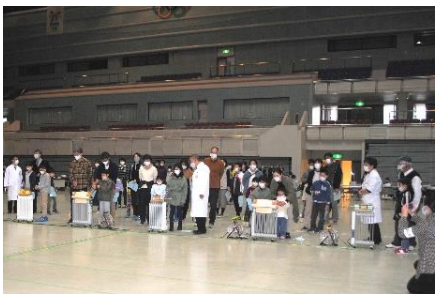
結城　匡啓先生

小平　奈緒さん

山中　大地さん

ｗｉｔｈコロナ新時代特別企画　（令和２年 11 月）

Part1 ちびゆりのみんなで DISCO
Let's Dance! Let's get going!



Part2 大嶋さんの宇宙のお話･実験･
ものづくりで Let's grow a dream in space!

Part3 杉崎かなえの
healing evening music

ｗｉｔｈコロナ新時代の教育会運営

令和２年９月、教育会館を拠点にしたオンライン会議が実施できるようにＭＡＸＨＵＢとｗｅｂ会議ツールＺｏｏｍの有料プランを導入。これにより各種会議のオンラインでの開催や、参集とリモートを併せたハイブリッド開催が可能となった。

『原点×転換×未来』
次の十年にあゆみを進める長野上水内教育会

教育会沿革史編集委員会
（長野上水内教育会）

一　はじめに

長野上水内教育会は、二〇一〇（平成二十二）年四月一日、上水内教育会が長野市教育会に吸収合併される形で発足した。明治・大正・昭和・平成と時代が変遷する中で、長野市教育会と上水内教育会は、それぞれに百年以上の歴史を刻んできた。長野上水内教育会は、子どもたちのために、時代の課題に対応しつつ教育実践の充実・発展・深化を図り、教師の資質向上や地域文化の向上等に精進し、令和を迎えた。

『原点×転換×未来』

これは、二〇一九（令和元）年に長野上水内教育会の創立十周年記念事業を企画した際のテーマである。歴史をもつ長野上水内教育会の十周年記念事業を企画するにあたって、「長野上水内の教職員や子どもたち、教育会の未来に向け、元気が出るような記念事業を実施したい」「この地から未来の世界や日本を担う人材が育つための、ささやかなきっかけになれば嬉しい」という願いを確かめ合った中で設定されたテーマである。「十年の歩みを振り返りながら、初心を忘れず、未来に向かって前進していこう」という思いを皆で大切にして、記念事業に取り組んだ。

当稿では、異なる歴史を歩んできた二つの教育会が合併を経て、新たな出発を果たし、十数年の歩みを進めてきたという、県下の他の教育会にはおそらくないであろう経緯・経験を記し、当教育会の特色ある取り組みをお伝えしたい。

長野市教育会・上水内教育会の合併前のあゆみを「原点」、両教育会が合併し新たなスタートを切り、諸課題に対応しながら教育会として様々な事業を推進してきたことを「転換」、コロナ禍において教育会のあり方を見直す中で、学びを止めないために時代に対応し新たな形で歩み始めたことを「未来」と捉え直し、当教育会の活動を振り返ってみたい。

二　『原点』　長野市教育会・上水内教育会のあゆみ

合併前の長野市教育会、上水内教育会の歴史を略年表で概観し、原点ともいえるそのあゆみを確認したい。

1　長野・上水内における教育会の発足（明治期）

略年表

一八七五（明8）年　第一回第二五大区教員集会

一八八〇（明13）年　上水内教育会設立

一八八四（明17）年　長野教育談会設立（長野町）
↓長野教育会に改称

一八八五（明18）年　上水内教育談会設立
山陰部教育会設立
西部教育会設立

一八八六（明19）年　山陰部教育談会設立
長野東部教育談会設立
信濃教育会創立

一八八八（明21）年　上水内郡教育会設立

一八九三（明26）年　北部教育会設立

一八九五（明28）年　五地区教育会となる（北部・平坦部
平坦部東部・山陰部・西部）

一八九七（明30）年　郡夏期講習会（長野県師範学校）
上水内郡から長野市発足

一九〇〇（明33）年　信濃教育会上水内部会発会

一九〇七（明40）年　長野市教育会創立

一九〇八（明41）年　「上水内郡誌」（県下初の郡誌）刊行

合併により誕生した現在の長野上水内教育会だが、そもそもは明治期に当時の行政区画に沿う形で設立された「上水内教育会」が共通のルーツとなっている。その後、明治

期には村の合併・分割等が頻繁に行われたが、市制・町村制等の制定に伴い、一八九七（明治三十）年には上水内郡から長野市が発足した。

一九〇〇（明治三十三）年の信濃教育会上水内部会発会時は、まだ一つの会であったが、一九〇七（明治四十）年に長野市教育会の創立に伴い、別々のあゆみを進めることになる。一九〇八（明治四十一）年には、県下初の郡誌である「上水内郡誌」が刊行された。刊行は、上水内教育会の先輩方の調査研究によるものである。

2　大正から昭和初期の両教育会

長野市教育会略年表

一九二三（大12）年　長野市と吉田町・三輪村・古牧村・芹田村合併
一九二八（昭3）年　「川中島戦史」刊行
一九三〇（昭5）年　「善光寺小誌」「唱歌教授細目」「作品を通しての綴方指導概説」刊行
一九三三（昭8）年　「手工教授細目」発刊
一九三七（昭12）年　「郷土学習帳」刊行
一九四四（昭19）年　長野市教育会解散
一九四六（昭21）年　大日本教育会長野県支部長野分会発足
　　北信六郡連合教育会に加入

上水内教育会略年表

一九二〇（大9）年　戸隠夏期大学開講
　　上水内郡史料展覧会
一九二三（大12）年　吉田町・三輪村・芦田村・古牧村が長野市へ編入
　　林間夏期大学
一九二四（大13）年　「上水内郡及長野市史料写真帳」刊行
一九三三（昭8）年　「戸隠郷土調査概要」刊行
一九三六（昭11）年　上水内教員互助会設立
一九三七（昭12）年　「一茶句抄」刊行
一九四二（昭17）年　「上水内教育会沿革史」・「黒姫山」刊行

それぞれに新たなあゆみを始めた長野市教育会・上水内教育会は大正から昭和初期にかけて、様々な刊行物を発刊した。各種研究調査活動が充実していたことを窺い知ることができる。

上水内教育会では、自主研修の場として、大正期にはすでに戸隠夏期大学や林間夏期大学を開講している。

3　戦後の両教育会

長野市教育会略年表

一九四七（昭22）年　長野市教育会会則制定（再発足）
教育研究部一〇新設決定
一九四八（昭23）年　日本教育会へ参加決定
一九五〇（昭25）年　小中学校合同音楽会開催
一九五一（昭26）年　長野市教育会会則改正
一九五四（昭29）年　上水内郡の一〇ケ村が長野市に合併
一九五五（昭30）年　長野市教育会会則改正
長野市児童生徒科学作品展開催
一九六一（昭36）年　「長野市小学校社会科資料集」出版
一九六二（昭37）年　会誌「長野市教育」発刊
一九六三（昭38）年　長野市教育会を社団法人長野市教育会に変更

上水内教育会略年表

一九五〇（昭25）年　野尻湖夏季大学開講
一九五三（昭28）年　会誌「上水内教育」創刊
「上水内の自然と人文」刊行
一九五四（昭29）年　上水内教育会館落成
平坦部支会が長野市に編入
「会報」創刊
一九五五（昭30）年　南部教育会が分離独立総会
一九五八（昭33）年　「上水内郡地質誌」・「上水内郡地質図」刊行
一九五九（昭34）年　「八木文庫」設置

戦後、再スタートを切った両教育会である。上水内教育会ではこの後五十年にわたって続く夏季大学を一九五〇（昭和二十五）年に始めている。一九五四（昭和二十九）年には旧上水内教育会館が完成した。長野市教育会では、小中学校合同音楽会や児童生徒科学作品展の開催を始めている。この期間、上水内郡内では多くの村が合併を行った。また、上水内郡内から長野市への編入（古里村・柳原村・浅川村・大豆島村・朝陽村・若槻村・長沼村・安茂里村・小田切村・芋井村が長野市に編入）があったことで、行政区画の変更に伴う教育会の枠組みの変更もあった。それぞれの教育会の会誌の創刊が行われたのもこの頃である。

4　昭和中期から平成期の両教育会

長野市教育会略年表

一九六六（昭41）年　長野市教育会館竣工式
一市三町三ケ村と合併し新長野市誕生
一九六七（昭42）年　「長野市教育大綱」制定
一九六九（昭44）年　「善光寺史」刊行
一九七〇（昭45）年　長野市南部、更埴教育会より分離し長野市教育会に統合、新長野市教育会発足　「長野市教育会報」創刊
一九七四（昭49）年　郷土講習会開始
一九八一（昭56）年　「長野市教育会沿革史紀要」第一輯刊行
一九八三（昭58）年　教養講座開始
一九八六（昭61）年　第一回長野市教育会夏季大学開講
一九八七（昭62）年　「渡辺敏全集」刊行
一九九一（平3）年　「長野市教育会史」発行
二〇〇五（平17）年　平成の大合併により豊野町・戸隠村・鬼無里村・大岡村が長野市に編入
二〇〇七（平19）年　長野市教育会百周年記念総会講師　作家　五木寛之「今を生きる力」
二〇〇八（平20）年　会誌「長野市教育百周年記念号」発行
二〇〇九（平21）年　上水内教育会との合併契約締結式
二〇一〇（平22）年　信州新町・中条村が長野市に編入
会誌「長野市教育第八七号（最終号）」発行

上水内教育会略年表

一九六六（昭41）年　重松鷹泰講演会（以後、毎年開催）
一九七〇（昭45）年　「上水内郡誌・自然編」刊行
一九七六（昭51）年　「上水内郡誌・歴史編」刊行
一九七八（昭53）年　第一回郡臨地講習会　第一回郡教育懇談会
一九七九（昭54）年　「上水内郡誌・現代編」刊行
一九八三（昭58）年　上水内教育会館建設三〇周年記念総会で片岡仁志講演
一九八九（平元）年　「上水内教育会史」発刊
一九九三（平5）年　「歩み続けむ」重松鷹泰講演集の発刊
一九九九（平11）年　新上水内教育会館の竣工　野尻湖夏

季大学五〇周年記念

二〇〇五（平17）年　市町村合併で郡内の豊野町・戸隠村・鬼無里村が長野市に編入

二〇〇九（平21）年　長野市教育会との合併契約締結式

二〇一〇（平22）年　信州新町・中条村が長野市に編入

会誌『上水内教育』第九二号（最終号）刊行

一九六六（昭和四十一）年、長野市教育会館が竣工した。この年、一市三町三ケ村（篠ノ井市・更級郡川中島町・更北村・信更村・上水内郡七二会村・埴科郡松代町・上高井郡若穂町）の合併による新長野市が誕生した。この後数年間は行政区画と教育会の枠組みが異なる期間があったが、一九七〇（昭和四十五）年に解消した。一九八六（昭和六十一）年に長野市教育会でも夏季大学が開講されるようになった。上水内教育会では、この期間に「上水内郡誌」の三編が刊行されている。それぞれの教育会のそれまでのあゆみをまとめ、一九八九（平成元）年に「上水内教育会史」、一九九一（平成三）年に「長野市教育会史」が刊行された。

一九九九（平成十一）年には、現在、長野上水内教育会館として利用している、新たな上水内教育会館が竣工した。

二〇〇五（平成十七）年に一町二村、二〇一〇（平成二十二）年に一町一村が上水内郡を離れ、長野市に編入した。この時期に両教育会の合併に向けての協議が行われ、二〇〇九（平成二十一）年に合併契約が締結された。

三　『転換』１　長野上水内教育会の発足まで

二〇〇八（平成二十）年十二月一日に公益法人制度改革三法（一般社団法人及び一般財団法人に関する法律、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律）が施行された。

この法律の施行により法人制度は、従来の法人から一般社団法人及び一般財団法人と公益社団法人及び公益財団法人の二つに改組されることになった。

そして、平成二十年一二月一日から平成二十五年十一月三十日の五年間が新制度への移行のための暫定期間と規定された。

この法人制度改革は、従来の民法により設立された社団法人としての長野市教育会と上水内教育会にも影響を与

えた。

従来の社団法人である教育会は、移行のための暫定期間内に一般社団法人か公益社団法人に改組しなければ、存在しなくなるということになったのである。

当時、上水内郡では、平成十七年一月、豊野町、戸隠村、鬼無里村が長野市へ（更級郡大岡村も同時に）、平成二十二年一月には、信州新町、中条村も長野市へ編入し、残る自治体は信濃町、飯綱町、小川村のみの小規模教育会となり、会員数も二〇〇名を切ることになった。このままでは上水内教育会館の維持も難しくなる状況が予想された。また、どのように上水内教育を継承し、発展させるかという難題に直面する中、他郡市教育会と折衝する中で連携に応えてくれたのが長野市教育会であった。

上水内教育会の当時の担当者によれば、いずれは長野市教育会との合併を進めなくてはと考えていたが、合併を急ぐ必要性は考えていなかったという。長野市教育会は、上水内教育会との合併は考えていなかったようである。

しかし、教育会の状況に関係なく、法人改革が施行されることになった。どちらの教育会も新法人に改組しない限り存続できなくなったのである。『教育会を存続させたい』という強い願いの下、考えられる方法は二通りあった。一つはそれぞれの教育会が新法人に改組した後、合併を実施すること。もう一つは、先に合併してから新法人への改組を行うことであった。

法人改革の見通しが明らかになるにつれ、新法人への改組の手続きは、かなりの困難が見込まれることがわかった。まず、課題となるのは一般社団法人にするのか公益社団法人にするのかを見極めなくてはならないことである。

これに関しては、信濃教育会が公益法人化に向けて動き出していた。その状況を見るに、事務手続き上の困難はかなりのものであることが明らかになってきた。次にそれぞれが新法人に改組した後、例えば一方が一般社団法人で、一方が公益社団法人であった場合の合併はどうなるのか。可能なのかどうか。ここでも新たな課題が起きてくるということである。

二〇〇九（平成二十一）年度、合併協議会が設置された。両教育会の良さを継承しながら活性化するためにはどうしたらよいかと法人制度改革への対応を協議の中心に据え、真剣で慎重な討議を重ねた。その結果、両教育会の合併を先にして、その後に新法人化を進めることで合意した。

合併時期は新法人化の最終期限から逆算して決め出し、平成二十二年四月を目指して、まずは社団法人長野上水内教育会として出発することが確認された。

長野市教育会と上水内教育会は平成二十一年八月二十七日、更級教育館において合併契約締結式で両教育会会長が吸収合併契約書に調印した。次いで十月二十九日には長野市教育会臨時総会を開催し、「吸収合併契約の承認」「定款の変更承認」の議案を可決承認した。これをもって「長野上水内教育会」が誕生した。

両教育会会長による合併契約書への調印

四　『転換』２　長野上水内教育会発足当初の課題対応

１　一般社団法人化

二〇一〇（平成二十二）年四月一日、上水内教育会が長野市教育会に吸収合併される形で、長野上水内教育会が発足した。新たに発足した長野上水内教育会の喫緊の課題は、平成二十五年十一月三十日に迫っている新しい法人化への改組であった。

平成二十二年度事業報告書によると、公益法人化推進委員会を立ち上げ、次年度中の公益社団法人認定をめざして必要な事業を推進した。具体的には、定款等諸規定変更案の作成と検討をし、「必要な機関での議決・承認を得る準備」を進めていた。これによると、合併当初は、公益社団法人化を目指し、公益社団法人化のための定款や服務規程などを作成し、公益社団法人化に向けて準備をしていたことがわかる。事業報告書によると、平成二十二年十一月一日の第四回総会において、公益法人化に向けて以下のような計画が立てられていたことがわかる。

・平成二十三年九月申請予定、平成二十五年十二月最終

・〇〇支会の名称→〇〇地区教育会

これは先に信濃教育会が公益社団法人化したことの影

響が大きかったという。

ところが、平成二十三年一月二十八日第六回総会では、公益法人から一般法人への変更が協議され議決されている。この変更の主な理由は、財務管理と公益性の確保の困難さであった。財務管理の困難さとしては、公益法人としての監査を受けるには、より専門的な対応が必要になるため、教育会として税理士や会計士などに依頼する必要が出てきたこと。毎年行われる監査に対応するためには、現在の事務局だけでは対応できないため、資料管理・整理等を行う人員の増員が必要になること。これらの費用は会員から徴収する会費から支出するのだが、本来の教育会活動とは関係の薄いこれらの経費に会費を当てることへの疑問があること、などが挙げられた。また、公益性の確保としては活動の五〇パーセントが公益にならなくてはいけないということになり、教育会の活動の半分に公益性をもたせるとなると、今まで行ってきた会員のための活動が持続できなくなる可能性も出てきたことなどが挙げられる。さらに、公益法人は毎年行われる監査が通らなかった場合や公益性が確保されなかった場合などは解散となることがあった。

これに対して、一般社団法人となった場合は、年間約五万円程度の税金を払う必要があるが、それ以外は現活動を維持できること。また、一般社団法人からであれば、今後の状況により公益社団法人に移管することは可能であることが挙げられている。

このようなことを考慮したうえで、準備を続けてきた公益社団法人化から一般社団法人へと転換したのであった。

そして、平成二十四年三月二十二日に一般社団法人として認可され、同年四月四日に登記が完了した。ここに、一般社団法人長野上水内教育会が発足した。これに伴い、代議員会が総会となり、議決機関になった。

2　長野市教育会館の解体

(1)　解体までの経緯

新教育会発足に伴い、教育会事務局は旧長野市教育会館から長野上水内教育会館へ移転した。平成二十四年十一月の「あり方委員会だより№２」では、新教育会発足後の旧長野市教育会館の使用状況調査の結果が報告されている。それによると、この時点で築後四十六年を経過していた旧長野市教育会館は新教育会発足以降、教育会活動にはほと

んど利用されていない状況であり、会館を維持するための費用は年間約四十五万円で、今後も同程度の支出が予想されるということであった。これを受けて「あり方委員会」は、以下のような方針を打ち出した。

① ほとんど利用されずに維持費の支出だけが伴う旧長野市教育会館の所有を継続することは難しい。

② 土地の所有者は長野市であり、建物部分は教育会の所有なので建物部分を解体撤去してから土地は長野市に返す。

③ 建物の長野市としての利用希望の有無を確認してから解体の手続きに入る。解体費用はかかるが本教育会に財政的に余裕があるうちに実施したい。現在の予想見積額およそ一八〇〇万円。

解体前に仮囲いされた旧長野市教育会館

平成二十五年二月のあり方委員会で、長野市から「本市として貴会所有の長野市教育会館を使用する予定はありません」という回答を受けて、総会で解体に向けて動き出すことを提案した。

これを受け、「あり方委員会」の方針に沿い平成二十六年度までに旧長野市教育会館を解体することとなった。

伴って、旧長野市教育会館内の不要物品の整理、お別れの会、近隣地域への解体工事説明会が実施された。

⑵ 長野上水内教育会館としての館名碑と館名プレート

合併後、法人としても長野上水内教育会として発足したが、館名碑は上水内教育会のままであった。また、会館自体も名前が付されないままであった。このことを憂いて、平成二十七年、長野市教育会館解体を機に館名碑と館名プレートが制作された

館名碑と奥村秀雄先生

（館名碑は元の石の裏面を再利用した）。いずれも故奥村秀雄先生による揮毫である。

３　教育会主題の再検討

『敬愛の心と世界に拓く広い心を持ち、創造性豊かでたくましく生きる子どもの育成』は、平成十三年度からの長野市教育会の継続主題である。この主題は、長野上水内教育会発足後も継続されている。

長野上水内教育会は、平成二十四年発足三年目に喫緊の課題であった一般社団法人化を行い、腰を据えて事業内容の検討に入った。その一環として、教育会の主題の再検討が行われた。

平成二十四年六月、当時の小林久夫会長が、「あり方検討委員会推進案」の中で、教育会主題に関わって次のような説明をしている。

「本会の命とも言える主題は、諸事業や活動に際して常に対照されるべき重要性がある。一般社団法人申請の際に、事業内容や定款・諸規定と共に全体の中では検討されたが、期間限定であったために十分ではない」更に「信濃教育会や各教育委員会の願い、教育大綱、方針等にも変化がある。」

これを受けてあり方委員会では、教育会主題の再検討に入った。担当部会の第三部会では、教育会主題を「主題文の構造」「文言に存在する願いや価値」「主題と教育会の役割」という観点から、現教育会主題の分析を行っている。

平成二十四年十一月の「あり方委員会だより№２」には、第三部会が、「教育会主題や事業内容に検討を加え、関係他機関・団体と協議しながら、精選、再構築を提案する」として、途中経過を報告している。

翌平成二十五年七月の「あり方委員会だより№４」では、「それぞれの地域の教育力を大切に考え、教師の人間力と指導力の向上を新たに加味した主題を設定したい」と述べられている。

その後、表立っての教育会主題についての言及は見られなくなるが、検討は継続している。

五　『転換』３　長野上水内教育会事業の充実

発足当時の喫緊の課題（一般社団法人化・長野市教育会館解体等）を乗り切った長野上水内教育会は、職能向上団体としての事業に本格的に取り組み始めることになる。いくつかの変遷を経て、長野上水内教育会の事業は、大きく

四つに分けられる。四つの事業とは、研究調査事業・講演講習事業・研修助成事業・教育図書研究事業である。

研究調査事業は、新教育会創立当初、「本会対応研究委員会」「教科等研究委員会」「支会別研究委員会」という三つの組織でスタートした。そこに外国語活動やＩＣＴ教育などが委員会として加わり「教科等研究委員会」と「特別研究委員会」という二つの組織に改組された。このような研究調査事業の充実に伴い、平成二十九年度には、未来を見すえた大転換がはかられた。それは研究調査事業を、「教師力向上部」「教科研究部」「特別企画部」という三部で構成するものであった。新企画の目玉となる「教師力向上部」では、「塾企画運営委員会」が設けられた。そこでは、「共育塾」や「視察研修」等が企画された。また、信濃教育会との共催による道徳教育研究協議会のあり方についても、大きな転換が図られている。

講演講習事業としては、総集会の講演・夏季大学等が挙げられる。

一般社団法人化に伴い、従来の代議員会が総会となり議決権を持つようになったため、従来の総会が総集会となり、講演事業の主体となった。総集会では、毎年著名な講師の講演を行っている。

夏季大学では、三日間三講座から始まり、会員のニーズに合わせ講座数を増加した。平成三十年度からは、三日間八講座、令和三年度には九講座となった。

また哲学講演会の実施もこの事業である。新教育会発足に伴い一時休止していた哲学講演会が、平成二十八年度に哲学同好会主催で再開され、翌平成二十九年度からは、長野上水内教育会の事業として実施されるようになった。

研修助成事業としては、個人グループだけでなく、団体視察派遣にも補助金を出すようになった。

また、「長野上水内教育会報」を年三回、会誌『長野上水内教育』を年一回発行している。

教育図書研究事業としては、長野市だけでなく上水内郡も含めた資料集・地図などの作成・改訂に取り組んでいる。

１　研究調査事業

⑴　研究委員会

平成二十二年度、新教育会発足時は、「本会対応研究委員会」「教科等研究委員会」「支会別研究委員会」の三組織、四十委員会でスタートした。委員会構成は以下のようであ

った。

本会対応研究委員会　十一委員会

一般教育　「道徳」「進路指導」「健康教育」

特別教育　「科学展」「郷土誌」「情報管理」

資料作成　「地図」「社会科資料　小学校」

「社会科資料　中学校」

編集　「会誌」「会報」

教科等研究委員会　十八委員会

北ブロック　「国語」「社会」「算数・数学」「理科」

中ブロック　「国語」「社会」「算数・数学」「理科」

南ブロック　「国語」「社会」「算数・数学」「理科」

「生活科」「音楽」「図工・美術」「保健体育」

「特別活動」「特別支援教育」

支会別研究委員会　十一委員会

北部　「巡回展」「学力向上授業改善」

東北　「巡回展」「学力形成学力向上」

南部　「学力向上」

西部　「学力向上授業改善」

中部　「生徒指導」「学力形成学力向上」

東部　「人権同和教育」「巡回展」「学力向上」

平成二十三年度には、大きな転換が図られ、「教科等研究委員会」十六委員会と「特別研究委員会」八委員会に改組された。この組織構成は、新たな教育課程、教育会の課題に対応するための委員会の追加を経て、平成二十八年度まで採用された。ここでは、支会・ブロック単位の活動から、教育会全体を包括する活動に転換した。また、学習指導要領の改訂に対応し、時代の要請に応える必要から、委員会の選定・追加が行われた。構成は以下のようであった。

教科等研究委員会　十六委員会

「国語」「社会」「算数・数学」「理科」「生活科」「音楽」

「図工・美術」「体育・保健体育」「家庭科・技術家庭科」

「外国語活動・英語」「道徳」「特別活動」「特別支援教育」

「キャリア教育」「健康教育（平成二十五年度まで）」

「ＩＣＴ教育（平成二十六年度から）」

特別研究委員会　八委員会（平成二十八年度から九委員会）

「情報管理」「科学展」「郷土誌作成」「地図作成」

「小学校社会科資料作成」「中学校社会科資料作成」

「会報編集」「会誌編集」

「教育会史編集準備（平成二十八年度から）」

さらに、新教育会創立八年を迎えた平成二十九年度には、「教師力向上部」「教科研究部」「特別企画部」という部構成を採用し、未来を見すえた大転換が図られた。ここでは、教師力向上部が設けられ、教師の自主研修の場としての性格を打ち出したことに特徴が見られる。特に塾企画委員会では、「共育塾」の企画運営や「視察研修」を行った。また、平成二十九年度と平成三十年度には特別企画部に「十周年記念事業準備委員会」を、令和元年度には「十周年実行委員会」を置いた。令和三年度現在以下のような構成になっている。

教師力向上部　四委員会

「塾企画運営」「研修企画運営」

「楽しい授業と学級づくり」「わかる授業と学級づくり」

教科研究部　十一委員会

「国語」「社会」「算数・数学」「理科」「音楽」

「生活科・総合的な学習の時間」「図工・美術」

「体育・保健体育」「家庭科・技術家庭科」

「外国語活動・英語」「道徳」

特別企画部　十委員会

「デジタル広報」「科学展」「図工美術展」「書写書道展」

「郷土データベース」「地図作成」「社会科資料」

「会報編集」「会誌編集」「教育会沿革史編集」

⑵　道徳教育研究協議会

道徳教育研究協議会は、新教育会発足以前から、信濃教育会と共催で実施してきた。そこでは、信濃教育会発行の道徳副読本『わたしたちの道』を扱った実践発表を通し、資料活用の方策や道徳指導のあり方を研究協議してきた。ところが、「特別の教科　道徳」の始まりを受けて、令和元年度からは、信濃教育会との共催ではなくなったが、長野上水内教育会は単独での開催を継続した。その理由は、「所属全校の参加を得て、児童生徒の道徳性をより高める指導のあり方に加え、道徳の意義を考え合う機会にしていく」ということであった。

２　講演講習事業

講演講習事業は、より多くの会員の研修に直結する事業である。この事業は全部ではないが、一般社団法人化に伴い公共性を持つ事業として、会員以外の一般にも広く公開されるようになった。

公共性を持つ講演事業として、通常総会講演会（平成二十四年度からは総集会講演会）と夏季大学が挙げられる。

⑴　通常総会講演会・総集会講演会

通常総会講演会・総集会講演会では、毎年著名な講師を迎えている。平成二十四年度、一般社団法人化に伴い通常総会が総集会になった。これにより総集会講演会は講演講習事業の核として位置付けられるようになった。

なお令和元年度総集会では、長野上水内教育会創立十周年記念式典・記念シンポジウムを開催した。

⑵　夏季大学

夏季大学は、創立当時は、第一講座　宗教・哲学、第二講座　科学・芸術・教育、第三講座　歴史臨地講習という三日間三講座であった。第一・第二講座は若里市民文化ホールで、第三講座は臨地講習として現地で行われた。平成二十七年度には、以前から会員のニーズが高かった臨地講習が二講座に増えた。翌平成二十八年度からは、一日開催だった第一・第二講座を、半日開催とし、四講座（芸術、科学、教育、哲学・宗教）に増やした。

そして、平成三十年度からは、研究調査事業の教師力向上部の塾企画委員会が一つの講座を受け持つことになった。令和三年度、臨地講習は五講座に増えた。講演講習事業の公共性を鑑み、臨地講習以外は会員以外にも公開されている。

なお、令和元年度では、長野上水内教育会創立十周年記念特別企画として、「音楽の夕べ」が開催された。

⑶　哲学講演会

長野市教育会と上水内教育会では、西田哲学に代表される京都学派の哲学を学び続けてきた歴史がある。

上水内教育会では、野尻湖夏季大学とは別に講演会を開催していた。内容は西田哲学やその教育論などであった。特に平成八年からは、上田閑照氏（京都大学名誉教授）を招いて哲学講演会が行われていた。平成十五年からは、長

野市教育会と共催となり、郡講演会という名称から哲学講演会と名称変更をしている。平成十六年からは岡田勝明氏（姫路獨協大学教授）を講師に迎えている。

この哲学講演会は、平成二十一年以降、新教育会発足に伴い、一時休止となっていた。その中で、「哲学講演会を再開させてほしい」という要望が強くあり、平成二十八年度、長野上水内教育会哲学同好会が主催して再開された。講師は岡田勝明氏である。翌平成二十九年度からは、長野上水内教育会主催となった。

⑷　教育懇談会

この会は、長野上水内出身者、在職の会員が一堂に会し、講演や懇談を通して学び合い、県下の情報を交換し、親睦を深め合う会であり、講演講習事業の一つである。

長野市では教育会が主催であったが、上水内郡では校長会が主導していた。校長会の合併に伴い、平成二十六年度から教育会が主催する長野上水内教育懇談会となった。ねらいは「長野上水内出身者で教育行政や他郡市で活躍されている先生方と、長野上水内に在職されている先生方が一堂に会し、県下各地の情報を交換し、親睦を深め合うとともに、参会の先生方が明日の長野上水内の教育を考え合う研修の機会とする」である。

参加案内は、本来のこのねらいに合うように、当初の教育行政関係者・校長・教頭から、代議員・研究委員長と年々範囲を広げ、平成三十年度から希望者全員参加となっている。当然、懇談にあたってはテーブルの構成員が異質となることもこの会の特徴である。

内容は、まずねらいの前半にある校長・教頭の郡市代表者による近況報告がある。後半部分では、当初長野市教育委員長の近藤守先生による講話であったが、平成二十七年度からは研修の意味を強め、講師を招いている。

この講演と先の近況報告を基に平成二十九年度からはテーブルごとの懇談時間を確保するなど、毎年何らかの改善を図っている。令和三年度は、長野上水内教育会館を主

会場にして、リモートでの開催を行った。

⑸　初任者研修会

初任者の会員が長野上水内教育会や信濃教育会についての理解を深めるとともに、教師としての自覚と意欲を高める研修の場である。また、初任者相互の連帯を深めたり、先輩から学んだりする機会となっている。

3　研究会・同好会

長野上水内教育会発足時、二十一の研究会・同好会が作られ、活動が推進されていくこととなった。そして現在二十一の団体が活動を行っている。それぞれの時代の求める教育的な必要感と対応しながら、その内容も変遷してきている。

発足時から新しく開設されたものを中心に、その概要を見ていく。

平成二十三年度には、「長野上水内聴覚障害児教育研究会」が創設され、子どもの「ことば」と「学力」について日々の実践から語り合うことをテーマに活動が始まった。また「北信地区小学校管楽器教育研究会」も発足した。更に子どもたちの表現意欲を高めたい、という願いから発足したものである。平成二十五年度には「長野上水内幼年教育同好会」が、「中一ギャップ」に加え「小一プロブレム」なども世の中で話題になる中、接続期の子どもたちを「知ろう　語ろう　感じよう」と願い、発足した。平成二十七年度には、「長野県国際教育研究協議会長野上水内支部」が発足した。世界へ視野を広げ、多文化共生の二十一世紀を心豊かに生きる子どもたちの育成を目指し、活動が始まった。また、「子どもたちの学びの質を考える会」も発足した。実践記録から子ども一人ひとりの学びの深まりを志向する授業づくりをテーマに活動が始まった。

また、教育会発足当時から続く研究会・同好会も多数存在する。子どもたちの「興味・関心・意欲」「主体性」「考える力」「生きる力」「心の豊かさ」など、時代時代の子どもたちの様子をつかみながらテーマ・内容を決めだし、研修を積み重ねている。その姿勢は、現在も先輩の諸先生方から脈々と引き継がれてきており、どの研究会・同好会においても自主的活動が活発に行われてきている。

六　『未来』　コロナ禍でも学びを止めない

ｗｉｔｈコロナ・ポストコロナ新時代の教育会のあり

方を求めて

令和二年度は、長野上水内教育会も例に漏れず、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、諸事業の例年通りの実施開催が困難となった。総会などの諸会合は、可能な限り書面協議・書面決議を重ね、実際に集まらなくてはならない必要最低限の諸会合は、健康個人票の提出、マスクの着用、三密回避、手指消毒の励行等を徹底して実施してきた。一方、五月の総集会、七月の夏季大学をはじめ、教育懇談会、講師研修会、研究総委員会等はやむを得ず中止という判断を下さざるを得なかった。しかし、コロナ禍の中であっても、学校現場では「子どもたちの学びを止めない」「子どもたちの学びを最大限保障する」ことに知恵を出し合い、教育実践に努めてきた。当教育会においても、主題「敬愛の心と世界に拓く広い心を持ち、創造性豊かでたくましく生きる子どもの育成」のもと、当会の使命ともいえる教職員の職能向上及び人間性の向上に資する事業を止めず、できないならば代替の研修を、と考え続けてきた。

夏季大学・教育懇談会の代替として、会報三十二号に、夏季大学・教育懇談会の講師の先生方から各講座内容に沿った玉稿を寄稿していただき発行した。会報としては異例の四十ページにも及ぶ大部となったが、学びどころに溢れた貴重な資料となった。

また、令和二年の九月には、教育会館を拠点にしたオンライン会議が実施できるように、逸早くＭＡＸＨＵＢ（マイク・スピーカー・カメラ・タッチスクリーンが一体化となったオールインワンのミーティングボード）とｗｅｂ会議ツールＺｏｏｍの有料プランを導入した。これにより各種会議のオンラインでの開催や、参集とリモートを併せたハイブリッド開催が可能となった。オンライン会議で積極的に利用・運用する中で、活用法のノウハウが蓄積され、Ｗｉｔｈコロナ新時代の新しい事業の進め方の道筋を付けることができた。

ｗｉｔｈコロナ新時代特別企画（令和二年度）

感染拡大がいくらか落ち着いた令和二年の晩秋十一月には、「『Ｗｉｔｈコロナ新時代』の豊かで楽しい事業のあり方として、感染症予防策を講じながら、子どもたちと共に活動し、共に育つ研修をつくりたい。我慢することが多く、下を向いてしまいがちな子どもたちと教職員に、わくわくして元気になれる企画、そして共に学び合うことができる企画を届けたい」という願いの下、ビッグハットと若

里市民文化ホールを会場に、児童生徒参加型の三つの特別企画を企画運営した。

Part1「ちびゆりのみんなでDISCO

Let's Dance! Let's get going」

松本市出身のプロのストリートダンサーちびゆりさんとNHK長野放送局アナウンサー西川典孝さんをお迎えし、ダンスの披露、基本のダンスの練習、「原点×転換×未来」のお話も聞くことができた。

Part2「大嶋さんの宇宙のお話・実験・ものづくりで

Let's grow a dream in space!」

JAXA（宇宙航空研究開発機構）OBで、NPO法人宇宙アドバイザー協会の大嶋龍男さんをお招きし、宇宙や科学技術のお話を聞いたり実験を見せていただいたりし、実際にロケットを作成し、発射実験も体験した。

Part3「杉崎かなえのhealing evening music」

長野市出身のボーカリスト杉崎かなえさんとアンサンブルユニット・ソアルテの皆さんをお迎えし、生の演奏を聴くことができた。

参加者からは以下の様な声が聞かれた。

・「ダンスは多様性を大切にできるものだと思う。学校現場にとてもあっているので、大切にしていきたい。」（会員）

・「感染対策もしっかりしていて、安心して臨めました。」（保護者）

・「宇宙への夢と実際のロケット作り、とても楽しい時間でした。」（会員）

・「コロナ禍でいろいろ制限のある中での今回の企画は嬉しかった。」（多数）

続いて十二月には、研修企画運営委員会の企画講座として、東京の博報堂ブランド・イノベーションデザイン局デイレクターの岡田庄生さんをオンラインでの講師としてお招きし、約九十名の会員が各々に都合の良い場所で受講するという画期的な研修を実施することができた。

令和三年度の総集会は、MAXHUB・Zoomを用いたリモートによる開催とし、講演会はスピードスケート金メダリスト小平奈緒選手のコーチとしても知られる信州大学教育学部教授の結城匡啓先生をお招きして行った。また、講師研修会・初任者研修会もリモートで開催し、Zoomのブレイクアウトルームセッション機能を使い、グル

ープに分かれて話し合い、悩みを共有し合ったり、繋がりを深めたりすることができた。

夏季大学は、オンラインで四講座、臨地講習で五講座の九講座を行うことができ、専門性や人間性の向上に向けた有意義な研修の機会となった。

以上のように、コロナ禍においても学びを止めずに、ｗｉｔｈコロナ・ポストコロナ新時代の教育会のあり方を探りつつ、諸事業を推進している現在である。

七　おわりに

当稿は、主として、令和二年三月に刊行された『『長野上水内教育会のあゆみ』～創立十周年記念に寄せて～』を基に作成した。

『『長野上水内教育会のあゆみ』～創立十周年記念に寄せて～』は平成二十八年度に設置された「教育会史編集準備委員会」により調査・資料収集・編集・原稿執筆が進められた。令和元年度には、委員会の名称が「教育会史編集委員会」と改められた。四年間にわたる委員会の皆様方の多大な御努力・御苦労により、長野上水内教育会発足後十年のあゆみが見事にまとめられたのである。

特に編集準備委員会の段階から刊行に至るまでこの委員会の委員長をお勤めになった竹内久隆先生はじめ、編集・執筆に関わられた委員の先生方に心より御礼を申し上げたい。

長野上水内教育会は、合併後十周年を経て、新たな十年のあゆみを進めている。現在は特別企画部「教育会沿革史編集委員会」がそのあゆみの記録の蓄積等を行っている。

新たな十年も、教育の現場が対応しなければならない課題は次々と目の前にやってくるだろう。「教師の自主研修の場としての教育会」という役割を、さらに充実・発展させていく十年となるであろうことを実感しているところである。

【主要参考引用文献】

『『長野上水内教育会のあゆみ』～創立十周年記念に寄せて～』（長野上水内教育会　教育会史編集委員会編　二〇二〇年）

信濃教育会館　長野上水内教育会紹介パネル展出展資料（二〇一六年）

長野上水内教育会

特別企画部　教育会沿革史編集委員会

世話係　桂本久美子（安茂里小学校）

世話係　山田　直志（鬼無里中学校）

委員長　倉田みゆき（通明小学校）

副委員長　江島　正芳（山王小学校）

委員　山浦　昭男（芋井小学校）

委員　廣橋　晃代（昭和小学校）

委員　大久保明廣（綿内小学校）